



人にまっすぐ。

天遊

20

winter. 2012
大阪教育大学 広報誌



2012年長尾彰夫学長

新春インタビュー

明るい大学 元気のある大学 強い大学をめざして

新年おめでとうございます。新しい年を迎え、長尾学長に昨年を振り返るとともに、新年への抱負をおうかがいいたします。まずは、2011年を振り返っていただけますでしょうか。

長尾 昨年はなんと言っても3月11日に発生した東日本大震災が大きな出来事でした。本学もちょうど、入試の期間だったので、被災地からの受験者がどうなっているのか、不公平のないようかなり配慮をいたしました。また、学生、教職員から義援金をいただいたりして、本学なりに大震災への対応と支援の取り組みを行いました。震災発生直後に宮城教育大学の学長に、なにか支援のお手伝いをしたいと相談したところ、「もう少し待って。要請するから」というお返事でした。7月になって宮城教育大学の要請に応じて、被災し授業が遅れている中学生、高校生を支援するため、学習支援ボランティアの取り組みを実施しました。本学からは、他大学に比べて最も多い31人の学生をボランティアとして宮城県内の5校に派遣しました。

ボランティア学生のがんばりには、わたしとしてもすごく有り難かったし、嬉しかったです。宮城教育大学からも感謝をいただき、新聞にも取り上げられ、反響を呼びました。

学生の活躍もめざましかったですね。

長尾 女子ハンドボール部がインカレで優勝し、陸上のハンマー投げで女子学生が全国優勝しました。暮れには、アメリカン・フットボール部も1部昇格の入れ替え戦を同志社大学と争うまでに成長しました。教養学科芸術専攻音楽コースのオーケストラも、秋の定期演奏会で世界的なヴァイオリニストと共演するなど、活躍が目立つ年でした。

ところで、大学運営についてですが、昨年秋に国立大学法人評価委員会の平成22年度評価について、「順調である」という評価を受けました。

長尾 第2期中期目標期間として、最初の評価ですので、まずは順調なスタートを切れたといった感じです。ただ、運営費交付金については、機械的な「1%」削減はなくなりましたが、実質的には1%程度の削減があって、相変わらず財政が厳しいことには変わりありません。

京阪奈三教育大学連携についても進展しましたね。

長尾 三大学の関係者が同じテーブルに就



INDEX

1 2 3 4 5...8 1 2 3 4 9 10 11...13 14 15 16

長尾学長 ひと ラボ訪問 卒業生 かしわら国際 神霜祭 天王寺 STUDENTS FOR 附属学校園 TOPICS
新春インタビュー 最前線 CATCH! フェスティバル キャンパス大学祭 NOW! STUDY ウォッチ

いて議論を進めるという体制はできました。本年度中には三大学間の遠隔授業などが実現できそうです。さらに連携が本格化するよう着実に取り組んでいきたいと思っています。

さて、2012年の新しい年を迎えて抱負をお願いします。明るい話として天王寺キャンパスを新しい構想でデザインするという計画がありますね。

長尾 西館を改修し、天王寺キャンパスを“てんのうじ 教師の広場”として学校現場と結びつけた大学にしていきたいと計画しています。

ところで、大阪府立大学と大阪市立大学が統合して、新しい総合大学を作り、教育学部を設置するというニュースが昨年暮れ、マスメディアに流れました。実現されれば大阪に教員養成のライバル大学が登場するということになりますね。

長尾 大阪府と大阪市のおやりになることなので、直接どうこう言うことはないのですが、動向については注意深く見守らないといけないと思います。いずれにしても、ライバル登場となることについては、本学としてもとがなければならないといけないと思っています。一方では、国公私立を超えた大学間連携ということもいわれているので、もし、教員養成ということであるなら、そうしたことも考えていかななくてはならないと思っています。

柏原キャンパスを市民の憩いのスペースに

省エネキャンペーンについてはいかがですか。昨年夏は、“クーラーよりもクールビズ”をキャッチフレーズに掲げて取り組んだところ、大学構成員の協力を得て、大きく経費節減をすることができました。それにならって、昨年12月1日から今年2月29日までは、“ヒーターよりもセーターを”をキャッチフレーズにウォームビズを繰り広げています。他に今年の注目すべき取り組みは？

長尾 キャンパススクリーン作戦をさらに推し進めて、“キャンパスフラワー作戦”を繰り広げようと考えています。柏原キャンパスは国定公園内にありますので、地域の人も柏原キャンパスに来ていただき、憩いのスペースになってほしいと思います。自然豊かでこんなきれいな場所があるのだということを大阪府民や柏原市民に知っていただきたいのです。その取り組みの一環として、昨年12月にスイセンを植えました。

一昨年には、事務局棟の前に梅林も整備しました。エスカレーター付近の通学路には春にコスモスも植えると聞いています。秋には通学路がコスモスの花で飾られるのが、楽しみです。

さて、昨年は学長選挙がありました。再選され、2年続投することになりましたが。

長尾 課題は山積していますが、明るい大学、元気のある大学、強い大学をめざして、“沈着冷静”をモットーに今後も引き続きリーダーシップを発揮してまいりたいと思います。

(聞き手・広報室)

ひと最前線

003



クールな日本文化を音楽活動に

教育学部教養学科芸術講座
外国人教師
ヤニック・パジエさん

■「エキサイティングでした。そして、あっという間に時が過ぎていきました」

2008年、本学外国人教師として採用されました。大阪教育大学での4年間の振り返りの印象をこう語ります。

■卒業式、入学式、定期演奏会などで、長髪を振り乱しエネルギーにたくを振る姿は、中世の騎士のようです。

■昨年11月に実施された「第55回定期演奏会」(芸術講座音楽コース)は特に話題となりました。ベルリンフィルハーモニー第一ヴァイオリン奏者、シモン・ベルナルディーニ氏を特別ゲストに招き、本学オーケストラと共演しました。同氏とは、共にパリ音楽院に学び、18歳からユースオーケストラで5年間共演し、現在まで親交を深めています。練習の段階で世界的なソリストから直接指導を受けた学生たちは感動し、本番の演奏会も大成功を収めました。中でも、東日本大震災犠牲者への鎮魂を込めて作曲したヴァイオリンとオーケストラのためのエレジー(悲歌)『桜の涙』が特別に発表され、深い感動を呼びました。「作品がいろいろなところで演奏されると嬉しいです」

■1974年生まれ37歳。ロンドン王立音楽院、パリ国立音楽院で学びました。2001年からパリ・ラムルー管弦楽団の副指揮者として佐渡裕氏のアシスタントを務めるかわら、テレビ番組や映画音楽、オペラ・コミックの公演、現代作

曲家の録音の指揮等で活躍しています。2005年から兵庫芸術文化センター管弦楽団アソシエイト・コンダクターを務めました。

■南フランス・アビニョンの生まれです。ピアノ教師をしていた母の影響で音楽の道へ。「リズム感がいい」とパークッションを薦められ、オーケストラで演奏するようになりました。大阪教育大学の印象は、「素晴らしい学生に、素晴らしい先生方がおられます」ときっぱり。

次の目標は? 「今まで演奏してこなかった日本舞踊とのコラボなど、わたしのアタマの中はやりたいプログラムでいっぱいです」

■中でも日本文化の代表でもある『万葉集』に特別な思い入れがあるといます。昨年7月7日、七夕を題材に万葉集から『たなばた』の歌詞を取り上げ、女性合唱とオーケストラで永遠の愛を表現した作曲が、好評を博しました。プライベートでは温泉が大好きで、家族と出かけるのが何よりも楽しいといます。「関西弁とフランス語は語感やアクセントが似ていて懐かしく感じます」

■「日本人より日本文化に造詣が深いです」とは講座主任の中務晴之教授の弁です。今後も、クールな日本文化を音楽活動に取り入れるつもりです。(広報室)



File.016

教員養成課程保健体育講座

教授 太田 順康 (おおた よりやす)

中学校での武道の必修化に対応



「わたしのバックボーンはなんと言っても剣道です。剣道のお陰で今の自分があると思っています」

旧制中学で剣道を教え、鳥取市内の自宅に剣道場を開いた祖父の許(もと)で小さい頃から剣道に親しんできました。中学高校大学では剣道部で活動し、大学では武道論を学び、研究者の道に進みました。剣道史を中心にした武道論を専攻、剣道を中心にした体育方法を研究主題としています。

現在、力を入れているのが、中学校での武道の必修化への対応です。現行の学習指導要領(保健体育)は、中1は武道とダンスのいずれかを選択し、中2と中3は球技、武道、ダンスから2つを選択することになっています。来年度からスタートする新学習指導要領では原則、中1と中2で武道とダンスが必修になります。武道は、柔道、剣道、相撲から選択しますが、地域や学校の実情に応じ、なぎなたや弓道なども認められます。具体的には授業計画をはじめ、用具・武道場の整備、安全面への配慮、外部指導者との連携など学校現場には課題が山積しています。

太田教授は、武道の必修化がスムーズに実施されるよう中学校の研究授業に積極的に出かけているほか、文部科学省の「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践校事業」では、府下の協力者会議の座長も務めています。

生まれます」武道は今の日本人に失われつつある心の教育の1つとなるものとして魅力的だといいます。「現場での授業をどのように充実したものにするのか、先生方と話し合うと自分の研究にとっても参考になるし、面白いです」

太田教授が顧問を務めている剣道部は、全国大会に出場し上位をうかがうほどの実力を有しています。練習日には道場に必ず出て、気迫のこもった稽古を部員に付けています。「厳しく・明るく・楽しく」をモットーに学生を指導しています。競技者としても生涯現役でがんばりたい」

武道は戦前、学校現場で必修でしたが、GHQにより敗戦後7年間禁止されました。当時使われていた教材や資料は、戦争遂行の精神的支えとなったという理由で廃棄されました。太田教授は、古書店などに立ち寄ってはそういった資料を集めています。また、武道に関する巻物、伝書、体育に関する古い写真や絵はがき、著作本なども蒐集しています。「剣道に関して言えば、昔は舞台の上で試合を行っていた、今とは違う防具だった、審判は羽織袴の正装だったなど、興味深い事実が次々と明らかになっています。武道論の研究者であるので、仕事ではあっても、そういったものを発掘できたときにはわくわく、どきどきします」

「武道の研究者であるとともに、これからも剣道ひと筋で歩んでいきたい」と抱負を語ります。



武道は今の日本人に失われつつある心の教育の1つ



講演は、
エネルギッシュで
面白いと評判

「グローバル化に対応した人材の育成。教育におけるわたしのモットーは、この言葉に尽きます」

その中身である教師力、英語力、コミュニケーション力などを育成する指導法の1つとして力を入れているのが、「チーム・ティーチング(T、T)」です。小中高校の学校現場では、英語学習においてT、Tは徐々に取り入れられていますが、大学では、専門性が高い、研究者は互いに干渉しない、講義は単独で行うものという先入観、慣例からか、実施に至っていないのが現状です。

開講している大学院1年科目「英語教育学特論II」では、学部で開講している「外国語コミュニケーション」で習得した能力をさらに専門に特化することにより、スペシャリストとして将来国際人として通用する英語力を習得させることをめざしています。

「T、Tのメリットは、多様な学習機会と学習内容の提供、多面的な評価などができるところです」

T、T指導は2人の教員が担当します。英語教育専門の日本人教師と、オーラルコミュニケーション・アカデミックライティング・国際理解等を担当している外国人教師です。写真上の授業は、吉田教授とブルース・J・マルコム先生によるICT活用の指導の一場面です。受講生は11人で、授業はすべて英語で行われ、学生は、課題として提供された論文を輪読します。パワーポイントでプレゼンテーションを行い、ディベート、ワークショップ、ロールプレイ、シミュレーションなどの活動を展開します。



「英語母国語教師は、学生の発表をアシストし、日本人教師は、発表に対して批判的にコメントを加えることにより、アクティブな授業進行を心がけています。学生にとっては、批判的コメントが刺激となり、問いかけに答えるには、語学力に加えて専門的な領域の知識の必要性を再確認できます」。T、Tによる授業形態がどのような効果を与えるのか。それを計測する評価テストとして採択したVersant(口頭英語能力測定試験)では、文章構築力・語彙力において、有意な得点の伸びが見られました。

吉田教授は2002年、英語講座で初めての女性教員として着任。英語教育の研究を

多面的なアプローチで追究しています。

「教員養成大学なので、学生の志が1つで、わたし自身の研究目的と授業での指導が一致します。仕事がしやすいです」

趣味はバンジョーの演奏。アフリカ系アメリカ人が、アメリカにおいてアフリカのいくつかの楽器の特徴を取り入れて生み出した撥弦(はつげん)楽器です。語学力を磨き、英語教育研究者となるきっかけとなった外国留学のときに出会ったといいます。

講演は、エネルギッシュで面白いと評判です。「必ず笑いを取ることを心がけています。関西人ですから」と、いたずらっぽく笑います。

卒業生CATCH!

CATCH!
Yūma
Ito



特別支援教育は面白い



伊藤 雄真さん (25歳)

障害児教育教員養成課程卒
特別支援教育特別専攻科2009年修了
堺市立上神谷(にわだに)支援学校教諭

「子どもたちが可愛くて素直、すぐ生き生きしています。特別支援教育は一人ひとりに合った指導や支援ができ、自分自身の生き方を見直すきっかけにもなるので、面白いと感じています」

堺市立上神谷支援学校は、3年前に旧府立高校跡地に市立百舌鳥支援学校から分離新設された学校です。堺市在住の、知的障がいのある児童・生徒(小学部・中学部)が対象です。

赴任して2年目。1年目は4年生の担任で、図工科の教科担当となりました。「小学校のような教科書や指導書がない支援学校で1学期当初はすごく悩みました。そんなとき、初任者担当や学年の先生方など、多くの方々にアドバイスをいただき、授業の進め方だけでなく子どもとの接し方や、行動を捉える視点なども教えていただきました」

今年度は、持ち上りの5年生の担任で、音楽科の教科担当をしています。校務分掌は交流部長を担当。「今年度は、学校のある地域のお祭りに出店したり、近隣の小学校と交流したりしました。来年度はさらに交流を進めていきたいと思っています」

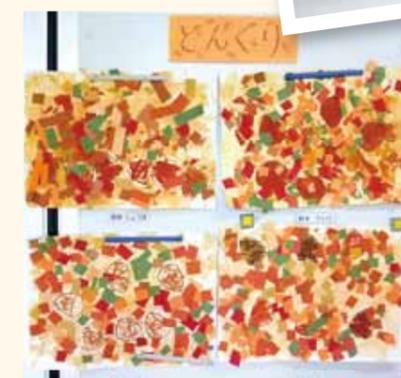
指導教員は上村逸子教授でした。「特別支援教育全般について専門的な教えをいただき、さらに人間として、教師としてどうやっていったらいいのかについての心構えを教えてくださいました」剣道部に所属し、4回生の時には主将を務めました。「顧問の太田順康先生からは社会人としてのルールやマナーを

教えていただきました。そのときの経験が、学校現場に身を置いている今、大変役に立っています」

教職をめざす後輩には、「真面目や熱心ということはとても大切なことですが、“遊び”があることも大切だと思います。ストレスを解消する“遊び”もそうですし、精神的な面での“遊び”、気持ちの余裕とか抜くところは抜けることも必要だと感じています」とメッセージを送ります。さらに、「教師は大変ですが、大変やりのある仕事を乗り越えて子どもの成長に出会った

きの喜びはひとしおです。子どもの目線で考えられる人になってほしい」

美馬環校長は「周りから“ユウちゃん”と呼ばれ親しまれています。堺市が求める豊かな人間性と専門性両方を兼ね備えた先生で、若手のリーダーとなるよう期待しています」と話します。



卒業生CATCH!

CATCH!
Tatsuro
Matsushita



松下 達郎さん (25歳)
中学教員養成課程国語専攻卒
大学院国語教育学専攻2010年修了
箕面市立第六中学校教諭

言葉の力、教えていきたい

「国語の教師になる。そう決意したのは中学校時代のつらい体験からでした」

物心つかない2歳の時に大きな手術を受け、腹部に大きな手術跡を残しました。中学2年のプール指導で、手術跡を友達にからかわれて傷つきました。それをきっかけに、悩むようになりました。「じゃあ、手術跡のことを作文に書いてみたらどうか」。相談に応じた副担任の国語科教員にそのように勧められました。「隠すものでない。大変だったことをみんなに語っていかなくてはならないのではないかと決心。そして、クラスで、さらに全校生徒の前でも作文に書いた内容をスピーチしました。「自分のことや、思いを一生懸命語りました。すると、翌日からびったりからかわれること

がなくなりました。言葉で伝える力って大きいなど実感しました」

中学高校と進み、国語の教師になると教員養成大学をめざしました。大阪教育大学では、学部では中国文学ゼミの佐藤一好教授、大学院では国語教育講座の住田勝准教授のゼミで学びました。

広報スタッフが学校を訪れて取材した日は、2年2組の国語科・読み物教材『走れメロス』の授業を実施しました。

「構造的読解力を身につけさせる指導で、板書の書き方も構造的。物語に入り込むのではなく、物語から離れて描かれた出来事の伏線や、なぜその人物が登場してきたのかの“仕掛け”を読み解く授業です」



大阪教育大学時代は、学部の4年間、大学院の2年間、継続して学習指導ボランティアとして児童養護施設・武田塾(柏原市)に毎週1回参加しました。そこで、いろいろな子どもたちと出逢いました。忘れられない少年がいます。高校受験に失敗し、保護者の協力が得られず、三者面談では、保護者代理で出席しました。面談の席で、彼からは「兄のように思っています」と紹介されました。「日頃は何も言わないのに、わたしのことをそのように思ってくれていたのか」。密かに感動したといいます。その生徒は現在20歳に。「今でも兄弟のようにつきあっています」

2010年度に箕面市立第六中学校に赴任の2年目。国語科を担当しています。

主原照昌校長は「授業づくりに熱心です。掲示物やカードなど様々なツールを使って生徒の理解を深めようと努力しています。学級づくりでは生徒との関係を深めようと家庭訪問をいとみません。若手教員のリーダー的な存在となるよう期待しています」と話します。



CATCH!
Sahori
Mizoguchi



宇宙の不思議を体験してみませんか

溝口 小扶里さん (28歳)
教養学科自然研究講座卒
大学院修士課程2009年修了
仙台市天文台学芸員(企画交流担当)



「本に載っていた天体写真を見て、小さい頃から何となく興味があったのですが、天文学の道に進んだのは人との出逢いがあったからです」

溝口さんは、岡山県赤磐市の出身で、県立岡山城東高等学校に入学しました。1年の進路指導の時に大学進学のことを考えて「ぱっと、宇宙のことが頭に浮かびました」。そして、高校3年生の夏休みに地元で有名な国立天文台岡山天体物理観測所を訪ねました。そこで出逢ったのが、観測所に隣接する岡山天文博物館の栗野諭美館長です。本学教養学科の定金晃三教授のゼミで研究した方です。

栗野館長に進路を相談するようになりました。「天文学の研究だけでなく、普及もできる仕事もしたい」。その思いを受け止めた館長

のアドバイスで、大教入学をめざします。3回生から定金教授の研究室に入り、研究三昧の生活を送りました。「観測室に泊まり込んで何日も研究に没頭しました」。夏休みは、実家に帰り、岡山天文博物館でアルバイトをし、館内の案内、チケットの販売などを体験しました。

広報スタッフが昨年11月、仙台市天文台を訪れたときは、溝口さんがプラネタリウムの投映を担当。クリスマスをモチーフに、キャラクター「プラネくん」を動かしながら、ファンタジーの世界を再現しました。

仙台市天文台は57年の歴史があり、2008年7月に郊外移転し、新装オープンしました。地元・仙台市民に長年愛されている文化施設です。大学院1年の時にスタッフを公募していることを、研究室のメーリングリストで知りました。

「若いスタッフが多いので、話し合いながら新しい企画をどんどん進めることができます。土佐誠台長をはじめベテランのスタッフが応援してくれますので、とても働きやすい職場です」

3月11日の東日本大震災の発生時、溝口さんはスタッフルームにいました。「騒然としましたが、無事、入館者全員を避難させることができました」

しかし、施設設備には大きな被害を受けました。メインの「ひとみ望遠鏡」(口径1.3m)が東西方向に激しく揺さぶられ、水平レベルでのズレが発生しました。解体修理に3ヶ月を要し、10月初旬に復活しました。

「いつも、笑顔で仕事できています。宇宙や星の世界が身近に感じられるよう、市民や子どもたちに、わくわくとときめきを提供したい」と声を弾ませます。

卒業生CATCH!

CATCH!
Tomoya
Nishikawa



西川 智也さん (26歳)
2007年教養学科
芸術専攻音楽コース卒

一流のクラリネット奏者を
めざして

提供: 東京文化会館©青柳聡



2007年教養学科芸術専攻音楽コースを卒業後、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了。第18回日本木管コンクール入選。第23回宝塚ベガ音楽コンクール第2位、併せて会場審査員特別賞(聴衆賞)受賞。小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトX「ヘンゼルとグレーテル」に参加。オーケストラや室内楽等を中心に活動している。

昨年8月に行われた「第9回東京音楽コンクール」木管部門(クラリネット)で梅田俊明指揮の日本フィルハーモニー交響楽団と共演、優勝を勝ち取りました。若手音楽家の登竜門として知られたコンクールです。

オーケストラとの共同作業が難しいニールセンの協奏曲を演奏しました。審査員の鈴木良昭さんからは「演奏家としての自己表現を確立し得る技術を十分に示した演奏だった」と高く評価されました。さらに「技術的側面に隠された表現の魅力をさらに広げていけば、聴衆の心の中に入っていくことができ、「鬼に金棒」となる」と太鼓判を押されました。「自分らしさの表現力をいかに演奏の中に出していくのか、イメージを高められるよう、さらに勉強を重ねていきたい」と語ります。

大阪府吹田市出身。中学校の吹奏楽が音楽との出会い。最初はトランペットでしたがクラリネットの魅力に惹かれました。「他の木管楽器に比べて音域が広いので、演奏の自由度があります。なにより素直な楽器ですから」。現在は、東京を中心に音楽活動をしています。

「次の目標は、プロのオーケストラに入り仕事をしたいです」

大阪教育大学時代(2003年～2007年)は自宅の吹田市から約2時間かけて柏原キャンパスに通いました。「山の上にあるキャンパスというイメージでした。長い階段とエスカレータが懐かしいです」音楽の道に踏み入れたきっかけは、「元々はプロにはなるつもりはありませんでした。教職も視野に入れていました。大学に入ってから演奏家をめざすようになりました」

東日本大震災が起きた3月11日は、東京都内のアパートにいました。「子どもの頃に体験した阪神・淡路大震災と同じ強い揺れを感じました。不安、孤独でした」。そして、音楽活動をしていいのかと迷ったといいます。でも「音楽を通じて被災地を励ますことができれば」と、東京音楽コンクールにエントリーしました。

後輩の大教生へは、「少しくらい壁にぶつかっても夢を諦めるのではなく、さらに挑戦をしてみてもいいのではないかと。ぼく自身も挑戦は遅かったですから」

CAMPUS REPORT

●第6回かしわら国際フェスティバル
●神霜祭
●天王寺キャンパス大学祭



「第6回かしわら国際交流フェスティバル」を柏原キャンパスで開催

大阪教育大学と柏原市との共催による「第6回かしわら国際交流フェスティバルつなごろう、柏原から世界へ!」を11月3日(木・祝)に柏原キャンパスで開催しました。前回に引き続き神霜祭と同時開催となり、本学留学生、学生、一般市民を合わせ650人が参加し、大勢の人で盛り上がりました。

今年度は、歌・踊りを披露するステージ、各国料理の提供、各国の文化紹介をするふれあいテーブルと3つのイベントを同時進行で実施しました。

今年度も一般市民からも出演者を募集し、4つのパフォーマンスの応募がありました。地

元柏原市の児童の皆さんで構成されている「シラダンス・スペース」による創作モダンバレエの披露、同じく柏原市の団体「フラ オ ナニ フラリマ」によるフラダンス披露、インド出身のダナンジャイさんによる民族歌謡の披露、モンゴル出身のプヤンネメフ・テルメンさんによる伝統楽器「馬頭琴」の演奏等、会場はインターナショナルな雰囲気になりました。

かしわら国際交流フェスティバルは、大阪教育大学と柏原市のさらなる国際化を推進するため、本学留学生と市民との交流を図り、異文化理解、国際理解に寄与することを目的としており、来年度は5月に開催する予定です。





神霜祭

相原キャンパス

宇宙研究会

GOメンバーがいます。みんな本気で取り組んでいます!



神霜祭では大きなドームでプラネタリウムをしていましたね。1回生が主体となって、上回生がアドバイザーしています。

ダンボールドームの製作は大変だったのでは? 国立天文台の星の座標を元に製作しています。きれいなお碗型をめざして、設計図を元に改良しています。以前に比べ強度もかなり強くなりました。でもアクシデントもあるのでやはり組み立てが大変です。



神霜祭では手話を使って、漫画「ワンピース」の劇をしましたね。1回生が中心となって、ストーリー、衣装を作っています。日頃の成果を神霜祭で発表しました。

劇の完成度がかなり高いように思いました。上回生が劇や手話の指導をしてサポートして、メンバーの空き時間で練習しました。最終公演終了後は、涙を流して成功を喜んだくらい、パワーを注いでいました。

手話を学んで何か変わったことはありますか? 普段から相手に気持ちや考えを伝えるということを以前より意識するようになりました。

聴覚障がい学生と共に手話を学ぶ。手話をとおして人との交流、会話を楽しんでいます。



■貴村 仁
教員養成課程小学校理科2回生



■築坂 卓馬
教養学科人間科学専攻2回生

手話に対するイメージは? 難しいイメージがありますが、そうではなく、みんなが知らないだけです。手話は表現がユニークで、言葉にはない表現も手話では表現できることもあります。



LSB

8割以上のメンバーがダンス未経験者です。OBの方、先輩の指導でみんなうまく踊れるようになります!

どんな雰囲気クラブですか? ダンスの練習だけでなく、人のつながりを大切に、たくさんの方を先輩から教わっています。とにかく後輩思いで、メンバー仲良く「絆」を大切にしています。



■河野 果奈
教養学科文化研究専攻2回生

他にどんなイベントを開催していますか? クリスマス会では、歌の得意な先輩がアカペラを披露してくれました。また、4回生の引退を祝う場では、3回生が中心になって、ビデオレターや手作りケーキ、LSBオリジナルグッズをプレゼントします。



■久米 浩平
教養学科情報科学専攻2回生



■楠 敬太
■吉川 悠貴
大学院教育学研究科特別支援教育専攻2回生

活動の目的は? 東日本大震災で被災した障がい者の支援として、展示物を通して、現在の被災地の状況を知ってもらうことです。併せて、被災地の作業所で作られた授産品の委託販売を行い、作業所の活動支援につなげることです。

具体的な活動とその成果はいかがでしたか? 夏休みに行った「田野畑村夏休み応援プロジェクト」の紹介や震災関連の書籍、被災地の観光名所の展示を行いました。120人以上もの来客があり、授産品はすべて完売しました。また、来ていただいた方にメッセージを書いていただき、売上金と共に被災地でお世話になった福祉作業所「ハックの家」に送る予定です。

神霜祭での取り組みについて教えてください
1回生から4回生が混ざってチームを組み、一つ一つのジャンルのダンスのいいところをうまく見せることができました。

地域での活動もしているようですが? OBの先輩が所属する小学校でダンスを披露しました。「本気で取り組む姿から、仲間と協力することや意欲を持って取り組むことのすばらしさを伝える」ことが目的でした。また、地域のフェスティバルにも積極的に参加しています。



エコっ種

「楽しくエコをやりたい!」と思っているメンバーが集まっています。

神霜祭で企画した「おもちゃ交換会&エコクイズ」はどのようなものでした? キッズイベントを実施しました。家からいらなくなったおもちゃを持って来てもらって、エコに関するクイズに答え、好きなおもちゃと交換しました。子どもの頃から、エコやリサイクル、環境問題について、楽しく触れる機会があればと思い、企画しました。

普段の活動でどんなことをするのですか? 「ゲリラゴミ拾い」や「無人島での活動」をし、「ダブルスマイルサンタ」の活動に協力、参加しています。

「ゲリラゴミ拾い」ってどんなことをするのですか? 予告なく、ひたすら学内のゴミ拾いをします。

無人島でどんな活動をするのですか? 和歌山の無人島で、漂流ゴミを拾います。ゴミの分別についても調べ、きちんと処分します。島をきれいにした後は、飯盒炊爨や、もりで魚を獲ったりもします。結構「ワイルド」でしょ!!



「ダブルスマイルサンタ」という活動は? サンタの格好をして、子どもたちへプレゼントを届け、そのお届け料を海外の子どもたちへ支援します。プレゼントを受け取る子どものスマイルと海外の子どもたちのスマイルで「ダブルスマイル」という訳です。

今後の活動の予定は? この神霜祭を一つのステップとし、さらに多くの方々に被災障がい者の状況を知ってもらい、被災障がい者の支援を継続して行っていきたいと思っています。

どんな雰囲気で活動していますか? みんなで楽しく活動することがぼくらのモットーです。

東日本大震災被災障がい者支援プロジェクト

特別支援講座の学生、大学院生約100人が参加しています。

HOPE!

天王寺キャンパス 大学祭

THE シネマムービー映画シアター ーリベンジオブ脇役パラダイスー



第二部天王寺キャンパスで 大学祭を開催

「平成23年度体育・文化週間」(神霜祭・スポーツ祭・音楽祭等)に合わせ、本学第二部大学祭を11月1日(火)から5日(土)まで天王寺キャンパスで開催しました。学生による合唱やバンド演奏、ダンスなどを披露した初日の芸術祭を皮切りに、オリエンテーリング(2日)、子どもフェスタ(3日)、スポーツ祭(4日)、そして最終日には、後夜祭で締めくくられました。後夜祭は、雨天のため急きょ屋内に設置したステージで学生による寸劇などのパフォーマンスを繰り広げました。中庭では、模擬店などで賑わいました。5日間の行事は、いずれもアニメ映画などをモチーフに、脇役に焦点を当ててパロディー化した楽しい企画で、来場者を引きつけていました。



大阪教育大学で生きる学生の「今」がわかる。

STUDENTS NOW!

山城 大悟さん(やましろ だいご)
第二部小学校教員養成課程3年生

「自然は、なんでこれほどの仕打ちをするのか。ひどいと、心の底から憎みました」

8月から10月にかけて3回、「東北で学ばせてもらおう」と、第二部の学生仲間10人ほどで宮城県石巻市に行きました。

市内の避難所の清掃や、がれきの撤去などを行いました。9月22日に営業を再開しようとしていたガソリンスタンドが、牡鹿半島直撃の台風襲来で被害を受け、断念をせざるをえなかったのです。そこで泥を掻き出す作業をしながら、憤りを強く感じたと言います。「台風が去った後の海は美しく、なにごとにもなかったかのようにけろっとしていました」

「自分たちが 感じたことを他の学生に知らせたい」。「東北応援団」が取り組む第一弾の企画として天王寺キャンパス大学祭(11月5日)で支援活動を実施しました。避難所のリーダー、浅野仁美さんと知り合い、廃棄せざるを得なくなった支援物資を譲り受け、義援金に替えるバザーを大学祭で行いました。また、兄の紹介で知り合ったプロカメラマンの池間哲朗さんが撮影した被害の状況を伝える写真を展示しました。



学生の反応は様々。「なにしてんの?」という無関心には、「9か月しか経っていないのに、人はこうも簡単に忘れてしまうのか」と大阪と東北の遠さを感じました。と同時に「わたしは行けなかったけど、こういう活動をしてくれてありがとう」という声を聞いてやりがいも感じました。

大阪市内で教師をしている兄の協力、「将来教師になるなら学ぶことがたくさんあるから、是非行っておいで」と後押ししてくれた父。「行けなかった家族の心と一緒に東北へ行きました。被害の状況をこの目で見たかったのです。東北の人々と関わって、心に残ったことがたくさんあります。この活動をさせてもらい、有り難

かった」と、応援してくれた家族と共鳴してくれた仲間には感謝をしているといいます。

将来、小学校教師になる「応援団」の仲間たちは「東北で学んだことを子どもたちに伝えたい」という共通の目標をもっています。「もし、教師になって学校に勤務しているそのときに大地震が起きても冷静になれるのか。自分に問いかけてました。子どもたちはどのような表情をするのか、真剣に考えました」

「東北の今を思ってほしい。2011年を振り返って考えていこう」と1月には、参加した仲間と学内で報告会を取り組みました。

東北応援団から 「東北のこと忘れないで」



STUDENTS NOW!

「東日本大震災復興支援ボランティア」 宮城教育大学で報告会



支援ボランティア学生の仲間たちと



教壇に立ち、強く歩んでいく日本をつくることのできる子どもを育てる教師をめざしていく決意を語る胡本さん



胡本 義宏さん(えびすもとよしひろ) 学校教育教員養成課程 英語教育専攻(中学校コース)2回生

2011年夏、東日本大震災で被災した宮城県内の中学高校で、本学から派遣されたメンバーのひとりとして学習ボランティアに参加しました。事業の名称は「東日本大震災復興支援ボランティア」で、ボランティアに参加した全国の教育系大学の代表学生が、11月12日(土)、宮城教育大学に集まり、報告会を行いました。

本学は、7月30日(土)から8月5日(金)の1週間、参加11大学中最多の学生31人を5校に派遣しました。この報告会の代表の一人、

胡本さんは東松島市立矢本第一中学校に派遣されました。

「被災地の生の姿を見、自分が経験した大震災とどのように違うのかを知りたかった」という胡本さん。報告会で1つのエピソードを紹介しました。

伊丹市内の小学校から昨年10月、仙台市立高森東小学校に転校した児童の安否を気遣い、282人の児童一人ひとりがビデオレターで励ましの声を届けました。子どもたちは「阪神・淡路大震災の時ように、東日本大震災の場合であっても同じように復興できると確信します」とメールを送りました。

胡本さんも伊丹市内で15年前に自ら体験した阪神・淡路大震災を振り返り、震災直後

の状況と復興が進んだ現在の様子を写真で見せ、復興を強調しました。

胡本さんは、京都府内の四年制大学を卒業したあと、大阪教育大学に入学しました。前の大学では工学部で学びましたが、卒業後、就活はせず、一念発起して教職の道を歩み始めました。教育のもつ力の大きさ、影響力を実感したからだといいます。「子どもたちが日常生活でふれあうのは保護者ではなく教師です。いろいろな意見を聞くことができるのは教師の特権でもあります」

教壇に立ちたいという気持ちは強く、「勉強だけでなく、強く歩んでいく日本をつくることのできる子どもを育てられる教師をめざしていきたい」と抱負を語ります。

FOR STUDY



衛藤隆 理事長



吉村憂希 理事長

菊池政巳 参事



学校危機メンタルサポートセンターが 「第9回センターフォーラム」を開催

本学学校危機メンタルサポートセンターは、11月19日(土)に国際教育センター2階さつきホール(附属高等学校池田校舎内)で「第9回センターフォーラム」を開催しました。

今回は、日本セーフティプロモーション学会第5回学術大会との共催で、「学校危機の諸相とその予防戦略を考える」をメインテーマに、全国及び海外から学校安全推進に関わる教職員等約185人が参加しました。

発生から10年を経た附属池田小学校事件による犯罪被害の原点を振り返るとともに、3月11日に発生した東日本大震災を教訓として、大規模災害が発生した際に学校に期待される安全回復をめざした危機管理活動と復興支援活動の展開にかかわる課題を共有するのがねらいです。

初めに、附属池田小学校事件の被害者遺族である酒井肇氏が「被害者支援の原点

に戻って—私たちが望んだ支援、私たちが受けた支援—と題して基調講演を行い、被害者の視点に立った望ましい支援について語りました。

その後のシンポジウムでは、「大規模災害発生時に期待される学校における危機管理と復興支援」と題して、大阪府政策企画部危機管理室の菊池政巳参事が行政支援の観点から、「日頃からの訓練実施を通して児童・生徒の家庭を巻き込んだ防災意識の向上が大切」と話しました。またNPO法人青少年育成審議会JSIの吉村憂希理事長がボランティアの観点から、「子どもに安心を与えるため、学校・地域の信頼を構築することが重要」と説きました。

最後に、日本セーフティプロモーション学会の衛藤隆理事長の指定発言のあと、学校危機メンタルサポートセンターの小山健蔵セ

ンター長が「今後も安全について発信していきたい」と決意を表明して本フォーラムを締めくくりました。

【今後のセンター活動予定】

※開催場所は、すべて国際教育センター(池田市)です。

- 2月19日(日)
プロジェクトフォーラム
- 3月2日(金)
第10回センターフォーラム
- 3月4日(日)
第2回センターシンポジウム

詳細については、メンタルサポートセンター ウェブサイト <http://nmsc.osaka-kyoiku.ac.jp/> でご確認ください。

FOR STUDY

「男女共同参画とジェンダー平等」をテーマに 人権教育全学シンポジウムを開催

「第34回人権教育全学シンポジウム」を12月13日(火)、八尾市民会館プリズムホールで開催し、約700人の学生、教職員が参加しました。

このシンポジウムは毎年人権週間の半日を休講にして、開かれています。本学では昭和44年度に教職専門科目「同和教育」を開設して以来、人権教育を学部教育の大きな柱としてきました。部落問題からスタートした人権学習は、在日朝鮮人問題、女性差別問題、障がい者問題へと拡大し、その時々の変化や課題に対応しながら、幅広く人権を捉えるシンポジウムに発展してきました。今回は、昨年のシンポジウムで取り上げられた「働くことと人権」の議論を受け、それをつなぐ形で「男女共同参画とジェンダー平等—人権・教育の現状から—」をテーマに教育現場の現状や、それを取り巻く学校文化を切り口にして、議論を繰り広げました。

まず、大阪大学大学院人間科学研究科の木村涼子教授がテーマにそって講演しました。木村教授は、大学進学した大阪で障がい者問題を始めとする人権問題の必要性と出逢い、自らの就職活動で女性に対する就職



木村涼子教授

差別の壁に立ちふさがられた経験などを振り返り、ジェンダー問題の研究者となった経緯を紹介しました。同教授は、現代日本の教育を様々な角度からジェンダーの視点で検証したうえで、男女平等を確立するための教育の役割の重要性を述べ、「大学教育の課題、とりわけ学校現場で子どもたちへの人権学習を担う教員を育成する教員養成大学の役割は大きいものがあります。常に先進的な役割を果たしてきた大阪教育大学に期待します」と強調しました。

このあと、部落問題概論受講生会議等学生有志が活動を報告。「他人事から自分事へ」と題する制作ビデオを上映しました。

続いてパネルディスカッションが行われました。パネリストは木村教授のほか、本学教職教育研究開発センターの島崎英夫教授、養護教諭養成課程3回生の濱田千尋さん、コーディネートを男女共同参画推進担当学長補佐の鈴木真由子准教授が務めました。

濱田さんは、養護教諭養成課程では所属する学生すべてが女性であることについて、ジェンダーの観点から見直すべきではないかと問題提起を行いました。また、教職一般教

養の人権の授業について「学生にとってより魅力ある授業にするため、小中高の学校現場でリアルタイムに起こっている人権問題を盛り込んでほしい。そのためには、これからは学生の声を積極的に大学側に届け発信していきたい」と強調しました。また、島崎教授は「学校現場の教員と生徒の間で深刻な人権問題となっているのが体罰とセクシュアル・ハラスメント。それを犯すのは人との関係をつくる力、コミュニケーションづくりの苦手な人が多いように思う。学生の時代に人間関係づくりの力を培ってほしい」と呼びかけました。そのうえで、濱田さんの問題提起に応じて、「学生の声をしっかりと受け止め、人権学習の授業をより充実したものにしていきたい」と述べました。

鈴木准教授は、「人権教育は、当事者や教育関係者らの努力でこれまで大きく発展してきましたが、まだまだ課題が多いのが現状です。学生と教員が力を合わせて、男女共同参画の環境づくりに取り組むと共に、大阪教育大学の人権教育をさらに充実したものにしていきたい」とまとめました。



学生有志が司会



鈴木 真由子准教授

卒業生で児童文学作家 「灰谷健次郎」展示会とシンポジウムを開催



本学卒業生で児童文学作家の灰谷健次郎(故人)の没後五年にちなんで企画された「灰谷健次郎—母校 大阪学芸大学(現 大阪教育大学)から始まる創作への道」の展示会が11月1日(火)から同月25日まで、本学天王寺キャンパス東館2階・附属図書館天王寺分館で開催されました。

「兎の眼」(第8回日本児童文学者協会新人賞)、「太陽の子」(第1回路傍の石文学賞)、「天の瞳」(大佛次郎賞の最終候補、絶筆)などの著作で知られる、児童文学作家・灰谷健次郎は、昭和29年に本学の前身である大阪学芸大学に入学、卒業後は17年にわたって小学校で教員生活を送りました。「教師 灰谷健次郎」としての経験は、その後の作品にどのような影響を与えたのか。展示会では、ご遺族・岸本進一氏、灰谷健次郎事務所のご協力を得て、写真、肉筆原稿、原画等約140点が時代別に集められ、そのテーマに迫りました。

遺品の本に挟まれていた女子学生とのツーショット、大学入学頃のカッターシャツ姿の肖像写真、子どもたちに囲まれ笑顔の灰谷先生、テレビドラマ「せんせいけらいになれ」撮影現場での主演の武田鉄矢氏とのカットなどの写真類が目を引きました。訪れた20代の女子学生は「灰谷健次郎の作品は読んだことがあります。先輩とは知りませんでした。興味深いです」と話していました。

灰谷の横顔を語る

なお、灰谷健次郎を多面的な視点から語るシンポジウム「学び 教え 創った人間」を、命日である11月23日(水・祝)、天王寺キャンパス・ミレニアムホールで開催し、市民や現場教職員、在学生など約100人が参加しました。

シンポジウムでは、「教師 灰谷健次郎」から作家への転身の背景には、どのような心境の変化があったのか、小学校教師としての経験がその後の創作にどのような影響を与えたのか、教育観や児童観について、同じ教師時代から生涯の友だった児童文学作家の岸本進一氏と、親子のように身近だった甥の灰谷政之氏(太陽の子保育園長)らが語り合いました。

シンポジウムは、学校勤務時代から親交を深めた園田雅春教授(第二部実践学校教育講座)のコーディネートで進められました。岸本氏からのエピソードでは、学校での休み時間に子どもと無邪気に遊ぶなど無類の子ども好きだった灰谷先生、詩や作文をいっぱい書かせ、こまめに返事を返し、追い込み、乗せるのが巧みだった教師時代を紹介し、「教育者としての力量のすごさを、周りの先生方は誰もが認めていた」と話しました。そのうえで、「教えるのではなく子どもと共に育つのが教育だという教育観で貫かれていました。作家となって、子どもの作文から創作へのヒントを生み出したように思います」と強調しました。



また、岸本氏は「仕事だけでなく遊ぶことも一生懸命だった」と振り返り、灰谷氏も「当たり馬券を知的に分析する競馬好き」「美味しいものを食べるに海外へも向う食通だった」と横顔を紹介しました。そのうえで「保育園を作って運営を他人に任せましたが、自分自身、いつも子どもと一緒にいたかったみたいです」と、神戸市にある保育園を何度も訪れたエピソードを交えました。

シンポジウムでは、大阪学芸大学時代から教師時代にかけて親しく交友した、瀧口豊一氏(長野県在住)からのメッセージもインタビュー形式の記事で配布され、すでに文学を志していたものの、大学の授業にはあまり出席しなかった学生生活の様子や、教師となって児童詩誌『きりん』の編集者・浮田要三氏との出会いなどが紹介されました。

灰谷健次郎は非常に几帳面で、机の上はその時に取りかかっている仕事の資料以外には一切置いていなかったなどのエピソードも紹介され、参加者の男性は「著作を通してしか知らなかったが、今日のお話で灰谷健次郎の人柄を知ることができ、親しみを感じることができました。作品を読み直してみたい」と話していました。

会の呼びかけ人で第二部実践学校教育講座の池川敬司教授は「子どもが大好きで、子どもの心にそった教育者としても素晴らしいのではないか」と話していました。

01 教員養成課程がFD講演会を開催



「教員免許と教員養成のこれから」と題した教員養成課程FD講演会が10月26日(水)、本学柏原キャンパスで開かれました。

講師は、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長教授松木健一氏で、中教審「教員の資質能力向上特別部会」のメンバーとして積極的に発言しているオピニオン・リーダーです。

講演では、福井大学で進めた改革の経緯にも触れながら、今求められている教員の資質能力向上や専門性の高度化の方向性、とりわけ大学院レベルでの

教員養成の在り方や、教員免許制度と教員養成・採用・研修の方向がどのように変わるのかなどについて講演しました。

教員養成課程以外からの参加者も含め、教職員・学生55人が耳を傾け、活発な質疑を繰り広げました。

02 アメフト部、入れ替え戦で惜敗 来期に向け決意新たに



本学アメリカンフットボール部は、12月11日(日)に神戸市立王子スタジアム(神戸市灘区:王子公園内)で、同志社大学との1部入れ替え戦(関西学生秋

季リーグ)に臨みましたが、残り1分、あと3ヤードのところまで追い詰めたものの、17-20のスコアで惜敗しました。相手を上回る150人あまりの応援がスタンドを埋め尽くし、1つ1つのプレーに拍手を送り歓声を上げました。

本学体育会アメリカンフットボール部ドラゴンズは、関西学生リーグ2部Bブロックで全勝優勝し、26年ぶりの1部校との入れ替え戦でしたが、来期に生かせる戦いだったと関係者らは語り、心新たにしています。

03 柏原市民と本学学生、教職員が「第九」を共演

本学と柏原市との提携芸術文化プログラムである「第九交響曲」“歓喜の歌”の演奏会を12月18日(日)、柏原市・リビエールホールで開催しました。7万人余りの小さな地方都市と大学とが連携した全国でも例にないイベントで、毎年行っており、今回で9回目を数えます。

当日は、本学学生オーケストラと大学教職員、市民の歌声がつくりだす共演を、市民約700人が鑑賞しました。

演奏作品は、ベートーベン 交響曲第9番ニ短調作品125「合唱付」で、演奏は教養学科芸術専攻音楽コースの学生62人(指揮:ヤニック・バジェ=本学外国人教師)。出演者は、大阪教育大学第九を歌う会39人と柏原市第九を歌う会96人(合唱指揮:寺尾正・本学教授)。ソリストは、ソプラノ:浦田恵子さん(本学卒業生)、アルト:村井優美さん、テノール:皆木信治さん(本学卒業生)、バリトン:藤村匡人さんでした。

会場では、開演前に恒例のロビーコンサートが行われ、金管楽器によるクリスマスメロディーが演奏されました。

なお、この模様は同22日(木)午後4時48分からの関西テレビ放送『スーパーニュース アンカー』で放映されました。



本誌にご意見をお寄せください。

広報室では、今後の誌面づくりに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊vol.20 webアンケート



「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。



本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。この印刷物は、15,000部を924,500円で、すなわち1部61.6円で作成しました。



郵便はがき

5 8 2 - 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学管理部企画課

広報室行

料金受取人払郵便

柏原支店 承認

33

差出有効期間
平成24年6月
20日まで

切手不要

※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ①本学学生 | ②本学卒業生 | ③本学保護者 |
| ④本学教職員 | ⑤附属学校生 | ⑥附属学校保護者 |
| ⑦附属学校卒業生 | ⑧附属学校教職員 | ⑨名誉教授 |
| ⑩教育委員会関係者 | ⑪他大学教職員 | ⑫他大学学生 |
| ⑬その他 () | | |

〒582-8582